

○水谷令子* 富田寿代* 武井玲子**

(*鈴鹿国際大、**ライオン(株)家庭科学研究所)

目的 中央アジアではアラル海の塩水化、縮小化に加えて、農薬、化学肥料による水質汚染が深刻になっている。本研究ではこのような問題を抱える中央アジアに住む人々の生活文化を研究することを目的とする。今回は天山山脈周辺地域の生活用水の水質、使用実態を調査した。

方法 カザフスタン、キルギス、ウズベキスタンのホテル、レストランの厨房および民家で生活用水の使用実態の聞き取り調査を行った。各地の水道水等を採取し、pH、電気伝導度、残留塩素等 10 項目の測定は簡易メーターと簡易テストで、一般細菌、大腸菌群は試験紙を用い現地にて調べた。また、現地の洗剤成分の分析はライオン(株)家庭科学研究所でおこなった。

結果 これらの地域では水道が付設されており、水源は主に湖川水と地下水であった。湧水や地下水は“いい水”という概念があり、水道水をそのまま使っているが、一般に生水を飲む習慣はなく、沸かしてチャイ(現地の茶)にしたり調理に用いている。全採取地点の 50%以上から一般細菌が、数カ所から大腸菌群が検出され、残留塩素はどの水道からも認められなかった。水源からパイプで運ばれた水は給水タンクにいったん貯蔵されている。浄水処理は主に濾過で、塩素消毒はほとんど行われていないと考えられ、検出された菌類は給水タンク中で繁殖したと推測される。また、洗濯機の普及率は比較的高く、洗濯は毎日おこない、硬度の高い水に合ったりん酸塩と漂白剤を含有した洗剤を使っていることがわかった。しかし、検体からりん酸は検出されず、このような排水が水源を汚染しないように配慮されていると思われる。